

現代青年におけるアサーションと攻撃性および自己受容との関係

0707047

齋藤 亜由美

【目的】

アサーション (assertion) とは「自分も相手も大切にしたい自己表現」(平木, 1993) のことで、自分の意見、気持ちを正直に、率直に、その場にふさわしい方法で相手に伝えようとする表現法のひとつである。今日我が国では対人援助を主たる業務としている心理、教育、看護、福祉等の領域、また産業領域において、このアサーションを学ぼうという気運が高まってきている。

沢崎 (2006) はアサーションと言語的な攻撃性、および自己受容の関連を大学生と社会人を対象に調べた。その結果、アサーションと攻撃性、またアサーションと自己受容、各領域との間に相関関係が見られ、共通の要因がかかわっていることが示唆された。しかし、アサーションと言語的攻撃性との間に有意な正の相関があったことを示したが、アサーションの「買った商品に欠陥があったら交換してもらおう」項目への回答が「交換してほしい」という旨を「アサーティブに」(冷静に丁寧に) 表現するか、「攻撃的に」(強引に一方的に) 表現するのかが質問紙法において被験者には区別されずに回答する可能性が高いと問題視した。

本研究において、攻撃性尺度に「短気」因子を加え先行研究の部分的な追試を行うことを目的とした。また先行研究より、アサーションと攻撃性の間、またアサーションと自己受容の間に相関が見られる、と仮説した。

【方法】

2010年11月上旬～11月中旬に、某大学の学生を対象に質問紙調査を行った。質問紙は、サークル、授業などから協力者を募り調査用紙を配布、回収した。このうち質問紙に記入漏れがあった4名を除く107名(男性34名、女性73名、平均年齢20.09歳、標準偏差1.35歳)を分析の対象にした。質問紙の構成は以下のとおりであり、1以外を5件法で回答させた。

1. フェイスシート (学年, 年齢, 性別)
2. 青年用アサーション尺度 (玉瀬ら, 2001): 16項目。すべての項目を加算し「アサーション」

とした。

3. 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (安藤ら, 1999): 9項目。すべての項目を加算し「攻撃性」とした。

4. 自己受容測定尺度 (沢崎, 1993): 35項目。すべての項目を加算し「自己受容」とした。

【結果と考察】

アサーションと攻撃性および自己受容の各尺度間の中に有意な差が見られるかを検定するために、ピアソンの積率相関係数を用いて相関分析を行った。その結果、アサーションと攻撃性、およびアサーションと自己受容において有意な相関が見られた。本研究において追加した「短気」因子は、アサーション、関係形成因子と有意な相関が見られた。攻撃性と自己受容においては有意な相関は見られなかった。

この結果より「アサーションと攻撃性の間、またアサーションと自己受容の間に相関が見られる」という仮説は有意であることがわかった。また「短気因子が高いほど、アサーションは低い」と予想したが、短気因子とアサーション間には結果として正の相関が見られたため、「短気因子が高いほど、アサーションも高い」と示唆された。よって感情、思考、行動の3点がより豊かである人がアサーティブであり、ただ3点のバランス性が重要であると考えた。

次に先行研究と本研究で得られた相関係数に差が見られるかどうかを調べるために、相関係数の差の有意性の検定を行った。その結果、先行研究よりも本研究のほうが有意に、相関係数が低いものが多い傾向にあった。これは本研究において学生のみを被験者対象とし、アサーションにおける「課題解決」能力が社会人に比べて低いためであると考えられる。

本研究によりアサーティブな人ほど自己受容的であり、短気因子含む攻撃性も高いことが判明した。感情、思考、行動のバランスを日常的にとり表現する強化訓練をすることが自己実現につながると考える。

(指導教員 豊村 和真 教授)